

サニーベールのあんず畑

坂口立考

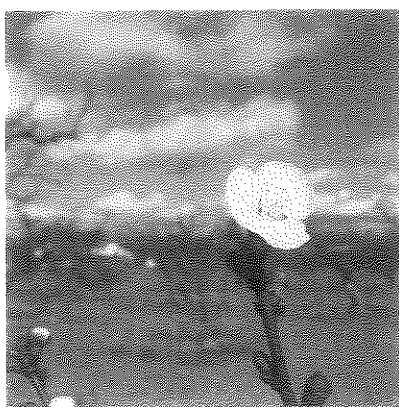
横長の綿雲が群をなし、空低くゆるやかに移動する。その空に向かつて垂直にのびた赤い枝の先に、小さな白い花がひとつ、太陽の光に向かつてしつかりと咲いている。あたりの空気はまだ冷たいけれど、淡い春の光に安心して、枝の中に蓄えていた手持ちの力が湧き出てきたかのようだ。その存在感に誘われて私は土の中に足を踏み入れた。柔らかい花びらに顔を近づけると微かに甘い香りがする。梅の花によく似ている。でも、梅ではない。この夏、どつしりと腰をすえたような太い幹に支えられた空間に、土と光と空気の恵みを集めて、独特の甘みを備えた柔らかい橙色の実を結ぶ。アブリコット。いま、家のすぐ近くのあんず畑の中にいる。

昨夏、六年あまり住んだメンロパークから、隣の隣の町サニーベールへ引っ越した。車で十五分くらいだが、南東に下つて気温も少し上がり、より太陽に近づいた感じがする。大学に進学する息子が家を出て大学の寮に移り住むのを機に、生活の場を一新した。需要に比べて供給量の限られた住宅事情を反映して新しい借家を短期間で探すのは厄介だったが、運よく静かな集合住宅に新居を定めるこ

とができた。そこは偶然にも、長年妻が通っていた陶芸スタジオのすぐ近くであった。そこから道路をはさんで反対側の大きな一画すべてが果樹園で、そのほとんどがあんずの畑である。

青い空が絶えないカリフォルニアという土地柄とはいえ、初春は曇る日もあれば小雨も降る。週末には、山の辺のトレイルを歩くことにしているのだが、天気の様子が微妙にうつろう春先は近所の平地を歩くのも悪くない。まだ葉が芽吹く前のあんず畑の佇まいは静かで、木のオブジェが並んでいるかのように簡素だ。全体を遮るものがないから、畑のいちばん奥まで見通すことができる。あんずの樹の足元を囲むようにして生えた菜の花がそよ風に揺れている。すこし低めの樹に近づき、背伸びして枝の先を覗き込むと、思っていたよりたくさんの赤い蕾が待機しているのがわかる。先頭グループと顔を覗かせている。昨夏、引っ越したばかりのわれわれを迎えてくれたのは、この畑のあんずの絶妙な味わいだった。取り立てのあんずをひと箱、毎日続けて食べた。あんずといえば、ドライフルーツのアプリコットのほうが馴染み深かったのだが、この香りと味わいは密かな発見であつた。なるほど、サニーベールとは「陽だまりの谷間地帯」という意味だつたのだとうことをあらためて思い出した。

スペイン語の地名の多いカリフォルニアにあって、サニーベール (Sunnyvale) はシンプルな英語名のひとつだ。先住イ



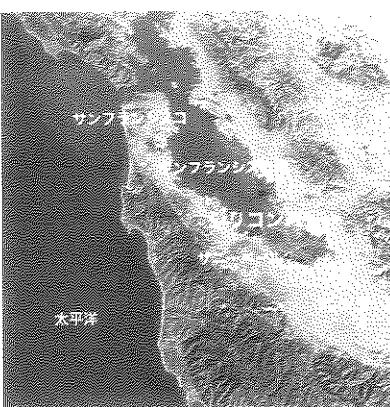
ンディアンの古い地名にせよ、後から入つて來た人たちの命名した地名にせよ、地形・風景に関わる単純な命名法は万国共通のように思われる。たとえば、サニーベールに隣接する街の名前。パロ・アルト (Palo Alto) は、高い木 (セコイヤの木のこ)、ロス・アルトス (Los Altos) も同じく、高い木々。マウンテン・ビュー (Mountain View) は山景色。確かに、晴れた日には湾の向こうに乾いた土の山脈がくつきりと見える。一方、サンタ・クララ (Santa Clara)、クバチーノ (Cupertino)、サンノゼ (San Jose) といった地名は、カトリックの聖人になんか命名。地形・風景でなければ、人名。これもまた、地名の典型パターンのひとつだろう。

ひと昔前、サニーベールは果樹園地帯であった。もともとは先住インディアン・オローニ族が居住していたが、スペイン人の入植時代をへて、十九世紀中頃に、アメリカ東部・中部からの移住がはじまつた。街の南側の山はぶどう畑の丘陵があり、ワイン醸造は今でも盛んである。平地を果樹農園が占め、ドライフルーツの生産、果物の缶詰工場も立ち並んだ。果樹を中心として地元産業の発展に加えて、二十世紀中頃からは、コンピュータを中心とする先端技術・産業が勃興し、いまや世界の先進産業の集まる土地、「シリコンバレー」と変遷した。半導体の主原料であるシリコンとは、コンピュータの身体のようなもの。サニーベール「陽だまりの谷間」という素朴な名前から着想して、今度は「シリコンバレー」(コンピュータ産業の谷間地帯) と呼ばれるようになったのだ。

ところで、ベールもバレーも谷間という意味だが、日本でいう山と山の間の狭い地帯という谷のイメージとはだいぶちがう。鳥瞰図でみれば一目瞭然だが、サンフランシスコ湾は内陸を細長くえぐつて南北に広がっている。長さは六十キロ、幅が最長十五キロもあり、えぐられて残つた地形が細長い

半島を形成している。その半島が東側は太平洋ぞいの山脈、西は湾を隔てて内陸の山脈とのあいだに挟まれている。谷間には違いないが、イメージとしては底の平らな器か、用紙トレイのような形といつたらよいだろうか。地元の生活では、実はシリコンバレーといふことばは使われない。この地域全体は「ベイエリア」(サンフランシスコ湾地帯)、シリコンバレーの本体である用紙トレイ地帯は、文字どおり、「ペニンスラ」(半島)とも呼ばれる。

シリコンといふことばに象徴されるコンピュータ・ハイテク産業だけでなく、幅広い先端技術の研究や学問教育も盛んである。とはいっても、山にのぼつてあたりを見下ろすと、大半は乾いた土色と濃い緑色に覆われて、高いビルもあまり見当たらない。いまでも全体の雰囲気は果樹農園的である。歴史の傍で住宅地の一画に存在をとどめたこのあんず畑からすぐのところに、アップルという名前のコンピュータ企業もあるが、それは果樹園からコンピュータへという歴史の証というよりは、いまでも果樹園的な風情を残していることの証だという気がする。



このあんず畑を當む農家の施設に隣接して、サニーベールの郷土史博物館がある。土地の開拓・街の建設はマーフィー一家の移住に始まるが、彼らの生活遺品から地元産業の歴史を証言する品々が展示されている。建物の外に、果樹農園の歴史を物語るパネル展示があった。その中に、古い写真を引き伸ばした目の粗い画像が一枚、私の目を惹きつけた。それは農園作業に

従事する日系移民家族の、わずかな休憩のひとコマであるうと思われる写真だつた。その日その時の光の様子と空気感がありありと感じられる。別のパネルには、この地にやつてきた移民家族による果樹農園コミュニティの名簿リストがあつた。イタリア系の名前、スペイン系の名前などに混じつて日本系の名前も散見された。

明治時代に日本から果樹園農民として移住してきた人たちの氏名。それらは数音節のことばの、小さな断片だが、それだけである想像を搔き立てる重要な素材になる。彼らは、果物を上手に育てる心と熟練技術を携え、海を渡つて異国之地にやつてきたのだろう。労働も生活も苦勞は絶えなかつたであろうが、その中でも、この陽だまりの土壤で芳醇な果物をたくさん実らせる工夫と苦心の中に新しいアイデイアを培つたに違ひない。その中にはカリフォルニアのフルーツ産業発展に大きく貢献するものもあつたかもしれない。ふるさとから遠く離れ、永住した新天地の労働の中に、それまでとは違つた時間の深まり方を感じることができたのではないだろうか。

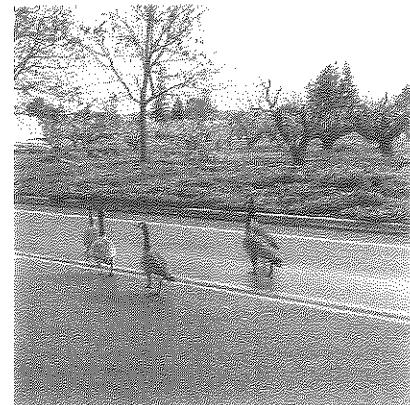
勝手な想像かもしれない。しかし、想像のほうが自由にかけ巡るのである。それは私の頭の中だけで起きているできごとではなくて、いまこのときの空気のふれあいの中できいている。何もないところから突然脈絡なく、想像なるものが出てくるのではない。場という触媒によつて想像が生まれ、ゆるやかな響きが連續して、想像がこの身に感じられる。共鳴するものがある時、じぶんの中に備わつていた響きの相手になるものが備わつてゐることに気がつく。それは私の手持ちの力。いまというこの場・この時の中にそつと現れるもの。五感がともにうまく働いて、すぐ周りの空気全体を含めた、

「じぶん」という身邊土壤に染み込むような、ゆるやかな時間がある時に、その実感が生まれる。いま私の「じぶん」は、彼らと同じ土の上を歩き、同じ光に包まれ、同じ空気に触れて、夏に実るあんずの柔らかな手触りと、独特な風味を思い浮かべている。いまというこのひとときの、じぶんを取り巻く空気が「想像の回路」なのだ。

ただ頭の中で考える、ということは、そもそもできないと思う。どんな時であれ、じぶんを包む空気の中で、何かとふれあう。内なる響きが感じられ、後からそれが内なることばに写され、紡ぎ直され、知らないうちに何度も繰り返されている。その全体過程が「思つたり考えたり」していることのはずだが、ふだんは「思考」だけが切り離されてあるかのように錯覚している。想像はじぶんという「ふるまいの世界」の中にある。私とは、「じぶんという風土」全体のことなのだ思う。

果物を育てるということは、土の手入れをし、水を遣り、光と空気に気を配り、あとは自然のなりゆきに委ねることである。静かに待つこと、ともに歩むことである。何かが結実するとは、その路ができるようにしむけること、そのための手助けをすることである。じぶんという存在もまた養われ、培われる風上そのものだと思う。それは「私」という自意識以前の、じぶん固有環境 자체が育つことである。それは直線的な、過ぎゆく時間ではなくて、螺旋の上昇のような、あるいは深まる回路のような時間だろう。じぶんという風土の時間。それは、「私」という意識の中だけにあるのではなく、自分という身体の中だけにあるのでもない。

その小さな博物館をあとにして、もう一度、あんず畠の端の土を踏んでから家に戻る。この不思議



な感覺は何だろう。ひとつだけ言えることは、愛らしい白い花
びらから連なるようにして生まれいでたものだということ。こ
の「あんず畑」が、じぶんという風土の情緒なのだ。心の外縁
といつたらよいのかもしれない。心の外縁？すると、どこから
ともなく、ガチョウ家族が現ってきた。道路をのんびりと斜め
に横切り、みなこぞってあんず畑に入ってきた。畑の端にでき
た水たまりで大胆に水をのむ者、草の根をほじくるようにして、
地中の虫を吸い出す者。思わず、その食欲旺盛な仕草を観察し
ているうちに、スウェーデンのマルメに暮らしていた時によく
あちこちの道路で出くわしたガチョウたちのことが鮮明に思い出されてきた。それもまた、あんず畑
という心の外縁である。

民話伝説から探る歴史

7

小嶋龍也

阿蘇小国の中河童

邪馬台国の女王となつた卑弥呼が阿蘇で修業をしたという伝説、遠い昔のことであるから、たしか
なことは云えないが、何となくおぼろげな姿が見えてくるような気がして身の回りがもやもやつてしま
ている。

そのもやもやが消えてしまうのか、それとも更に色濃くなつて、その中から何者かが現れて来るの
か、黑白つけ難いから未だにもやもやが続く。

阿蘇谷を取り巻く外輪山の外側に小国おぐにと呼ぶ熊本県の北端に位置する町がある。大分県と境を接す
る地域で、肥後熊本では奈良の都に一番近いと云えばそうであり、阿蘇山系の北端には間違いない。
小国郷の東に面する所は大分県を経て瀬戸内海に通じる。それ故に小国は都に近いから肥後の東の玄
関口とも云われている。ここに臺タケ（台）という地名がある。大字西里に小字名として台、西山の台、
東山の台という地名、これから連想したのは邪馬台国の台である。小国という國の文字持つ地名、そ
こに台の付く地名、弥馬を山と解して「山の台の国」とすれば、ヤマタイコクと語呂が合うような気